

*ポレーシェとは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



—チェルノブイリに思いをよせて—

ポレーシェ

ディードゥフさん来日!!

各地で講演会が開かれました。

7月30日、スマートでダンディーなディードゥフ氏と小柄でにこやかな奥さま、竹内さんの3名が、元気よく中部国際空港の入国ゲートから出てきました。早速、車でチェル救事務所へ。事務所で日程等の打合せ後、ホテルチェックインまでの時間を利用して、車に興味を持つ彼の希望で「トヨタ博物館」、奥さんの希望で「徳川美術館」を熱心に見学され、長時間フライトの疲れにも拘らず、初日からエネルギッシュな行動には、驚かされました。

2日目からは、名古屋市内・東京・長野県奈良井宿・京都市内を興味深く見学され、「日本のどこへ行っても、塵が少なく、道路が舗装されている」と、感心されていました。その合間に、名古屋市内では東邦ガス今池ガスビルで「ガスマイホーム発電システム・エコウィル」と「家庭用燃料電池」、京都市で「京都市廃食用油燃料化施設」、大阪府熊取町「京大原子炉実験所」、信州大学農学部の視察・見学と意見交換会を行いました。

伊那市・京都精華大学・京大原子炉実験所・名古屋市の4回の講演会（講演内容は2ページ参照）では、活発な質疑応答も行われ、ディードゥフ氏も参加者の関心の高さに予想外だと感想を口にし、専門家の方々とは帰国後さらにメールで連絡を取って行きたいと述べていました。それ以外に、チェル救運営委員会と2回の意見交換会が開かれ、今後のPJ展開に向けての方向性を話し合いました。訪日中、車での移動が比較的多く、事故渋滞に巻き込まれて2時間近くのロスも経験され、日本の交通事情を「ウクライナで日本の運転マナーに追いつくには50年かかるね・・・」と感心しながら日本をあとにされました。ディードゥフさんご夫妻、本当にありがとうございました。（神谷）



<長野県奈良井宿にて>

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

《ディードゥフさんの講演内容の骨子》（名古屋講演から 要約：河田）

- 日本の「チェルノブイリ救援・中部」の提案を受けて、2007年4月からナロジチで菜の花栽培を始めた。私は、ジトーミル農業生態学大学の「国立農業生態学大学地域エコロジー問題研究所長」もかねている。この研究所は、ナロジチなどウクライナ国内の放射能汚染地域における復興計画のために設立されたもので、「チェルノブイリ救援・中部」の提案は、まさに我々の要求に沿ったものだった。
- これまで、2年半にわたってナタネを栽培した。春蒔きナタネを2ヘクタール(ha)・秋蒔きナタネを2ha・合計4haだが、ナタネは連作障害があり、間作にナタネ以外のものを栽培する必要がある。現在は、ナタネの後にライ麦、その後に蕎麦などを栽培している。ライ麦は放射能を吸収しにくく、蕎麦は比較的吸収しやすい。こうした栽培方法から、全部で12haの栽培が必要である。場合によっては、更に多く必要になるかも知れない。
- 過去2年間の栽培成績では、春蒔きナタネは平均1.5t/ha、秋蒔きナタネは3t/ha収穫できた。春蒔きについては、この2年間、降雨量が平年の半分近くで、ナタネの生育期に雨が少なかったことが大きく影響している。しかし、秋蒔きは生育期間も長く良い成績であった。今後栽培するなら、秋蒔きが良いと思う。(注：3t/haの収量は、日本やヨーロッパ並みの成績で、ウクライナの酸性土壌では、通常これほどの収量は得られない)。
- これまでの実験で、土壌中の放射能の絶対量を、ナタネで顕著に減らすことは困難であることが分かった。理由は、セシウム137が土壌粒子に固く結合していて、ナタネが吸収できる水溶性のセシウムが少ないことだ。しかし、このことは汚染地域で農業ができないことを意味しない。すなわち、土壌中からナタネで今ある水溶性セシウムを吸収すれば、その後しばらくは土壌粒子から遊離してくるまでの間、別の作物が安全に作れることを意味するからだ。実際、我々が試したところでは、ナタネのあとに栽培した大豆(注：セシウムの吸収が良い)には、放射能がほとんどなかった。
- 将来は、ナロジチのような汚染地域に、ナタネ畑に隣接して、バイオディーゼル(BDF)やバイオガス(BG)装置を作り、同時に研修施設を作って、そこでナタネ栽培やBDFやBG、その他様々な汚染地域復興をテーマとして、講演会や研修を行えるようになることを夢見ている。

ディードゥフ夫妻日本の印象

ディードゥフさんご夫妻は旅行が好きで、これまで氏の仕事関係も入れてヨーロッパ各国を車で移動しており、外国での滞在にはそれなりに慣れておられるのですが、今回の日本訪問は、やはり新鮮な体験だったようです。帰国後、以前日本に行ったことのあるジトーミルのドンチェヴァ氏と話して、「日本はまるで別の惑星のよう」ということで意見が一致したそうですが、それは食事や初めて見る蝉、異なった植生というだけでなく、人々のこやかさと規律正しさ、自分の仕事に愛情を持って対していること、公共の場所の清潔さなどに感銘を受けられた様子。伊那で水田やリンゴ畑、酪農の現場を見た折には、「どこの国でも農民の仕事は厳しいものだ」と言われてました。奥さんのリュドミラさんは、梅干がとても気に入られ、「ウクライナにも酸っぱいプラムがある」ということで、作り方を詳しく尋ねてメモしておられました。ご自宅での製造のご成功を祈りたいところです。ディードゥフさんは、8月の京都の蒸し暑さには辟易されたようで、私のお貸した扇子を片時も放さずお気の毒でした。しかし、お二人ともごく短い間に箸の使い方を難なく習得され、滞在を十分に楽しんで帰られたと思います。

(竹内)



2006年に計画を立案し、ウクライナ側に提案してから3年が経った。2007年4月に、初めてナロジチでナタネの栽培を開始して以来、協力してくれているジトーミル農業生態学大学のニコライ・ディードゥフ准教授を、この度日本に迎えて行った講演会で、これまでの成果を説明していただき、新たな希望が見えてきた。一方で、当初期待した「土壤の放射能を大幅に減らすこと」は困難なことも分かった。やはり、実験室の実験ではなく、現実の汚染地域での実験でしか分からないことだった。しかし、この困難は新たな可能性のチャンスでもある。

● 誤算と発見

「放射性のセシウムやストロンチウムを効率よく吸収するナタネを栽培し、土壤を浄化する」という試みは、必ずしも期待通りではないことがこれまでの実験で明らかになった。理由は、事故から23年が経ち、放射能ががっちりとして土壤粒子に結合した結果、ナタネが吸収できる「水溶性」セシウムが少なくなっているからである。もちろんそれでも、ナタネの種子やバイオマスの放射能濃度は、(肥料条件で違うが)概ね1kg当たり500~800ベクレル(Bq/kg)あり、食用には危険な濃度である(日本の食用基準は370Bq/kg)。しかし、これでは1m²当たり200KBq以上もある土壤から放射能をすべて除去するには、相当な年月が必要である。事故直後だったら、もう少し効率よく除去できたかもしれない。これは、実地にやってみて初めて分かったことである。しかし、こうした困難は、必ずしも「放射能汚染地域で農業ができない」事を意味しない、という新たな発見を我々にもたらしたのである。土壤に固く結合した放射能は、エントロピーの法則によって、わずかずつ土壤中の水分に溶け出てくる。こうして水溶性になった放射能をナタネで吸収すれば、その後しばらくは土壤中の水分はきれいになる。そこに、ナタネ以外の作物を栽培すれば、文字通り非汚染作物が取れる理屈である。放射能を吸収しにくいライ麦などなら、なおさら都合が良い。ナタネの連作障害を避けるために、一度ナタネを植えた畑は3年間別の作物を植える。まさに、連作障害対策と安全な作物生産が連動することになる。

これまで、汚染のために作物栽培が危険だっ

た地域で、注意深く栽培すれば、農業が再開できる可能性を開いたのである。こうした事実をさらに科学的に裏付け、ウクライナ政府の汚染地域対策に政策提言できるようにしたい。来春には、ディードゥフ氏らと共同で論文を書く予定である。

● ナタネが吸収した放射能の処理

「放射能が土壤に固く結合する」という現象を逆用し、ナタネの油粕やバイオマスを使ってバイオガスを生産した後の、廃水中の水溶性放射性物質を処理できる可能性も見えてきた。ナロジチの土壤は酸性の砂質土壤であり、比較的セシウムが吸着されにくい、と考えられてきた。にもかかわらず、実際は固く結合した。ならば、初めから吸着力の強い粘土やゼオライト・活性炭などを使えば、速やかに吸着できるはずである。当初は、ナタネの放射能はバイオガスを取った後の廃水(液肥)に含まれるので、これを広い面積で自然乾燥し、濃縮してドラム缶などにつめ、永久保管することを考えていた。もし、廃水中の放射能の土壤吸着処理が可能であれば、きわめて簡単であり、しかも処理後の廃水は放射能を含まない優秀な液肥として再利用できる。こうした可能性を、農業生態学大学で新たに実験することを考えたい。もちろん、土壤吸着は放射能の強さに関係ない。化学物質としてのセシウムやストロンチウムの量のみが問題である。これら放射性物質のナロジチの土壤中濃度は、ppt(1兆分の1)程度であり、ナタネの濃度は更に低いので、処理装置はバイオガス生産後の廃水用として取り付ける、小さな装置で足りるはずである。

(河田)

チェル救の財政危機を克服するために!!・・・「財政再建委員会」から大切なお願い・・・

私たちは、07年より始めた「菜の花PJ」への賛同のカンパと郵貯「ボランティア貯金寄付金」で、この3年間ナタネ栽培、土壌・バイオマスの分析と放射能測定、バイオディーゼル油製造プラント・バイオガス製造装置建設を行いつつも、従来からの医療機器・医薬品援助・粉ミルク援助・奨学金供与・クリスマスキャンペーン等を継続してきました。しかしながら、事故から年月が経過するに従い、カンパの集りもしいに減少を余儀なくされ、財政危機に直面しています。この厳しい現状を突破し、活動の継続を模索する為に、ポレーシェ111号・112号で、読者の皆様にご支援をお願いしました。機関誌を購読いただいた読者の方から、早速「賛助会員」や「一坪キャンペーン」にご応募いただきましたが、まだまだ少人数です。

8月の運営委員会に於いて、財務体質強化に向け「財政再建委員会」の設置を決議し、8月30日に第1回会議を開催しました。

- ① 財政再建に関しては、7月の合宿・運営委員会で協議された事項（ポレーシェ112号「チェル救資金問題」参照）を、基本ベースとして、具体化案を検討していく。
- ② ポレーシェにて「緊急!!資金サポーター（賛助会員）年会費3,000円/人（ポレーシェ購読料を含む）大募集!!」・「菜の花畑一坪キャンペーン」を呼びかけているが、趣旨が不明確である。再定義をして、呼びかけ直す。
- ③ 官民の助成金申請を積極的に行う。④ カンパ金振込みの簡素化を行う。⑤ 本年度予算の見直しを行う。…などが協議され、以下の決定事項が、9月12日の運営委員会に報告・承認されました。

「賛助会員」を募集します。

- ・ 機関誌「ポレーシェ」を有料とし、その購読者を「賛助会員」とします。
- ・ 年会費は3,000円とします。
- ・ 有効期限は2010年1月（ポレーシェ115号）から1年間とします。
- ・ 中途加入者は、加入月から1年間とします。
- ・ 毎年切替月前に、次年度の年会費の納入をお願いします。

「一坪キャンペーン」を募集します。

- ・ プロジェクト期間中（2012年3月迄）1口3,000円とします。（何口でもOKです。）
- ・ 応募者は、ナロジチ地区の菜の花畑（現地）に、応援者として名前を表記させていただきます。
- ・ プロジェクト終了後に、発表する予定の報告書に、県名と苗字を記載させていただきます。

「2010年スタディツアー」計画予定

- ・ 「一坪キャンペーン」に呼応して、「2010年スタツア」の開催を検討します。（9/12運営委員会にて、10月の運営委員会で正式に判断を決定することで了承。）

「官民の助成金申請」を積極的に行う。

- ・ 2010年1月までに、助成金の公募を行っている6団体に、助成金申請を行うことを決め、申請担当者も決定しました。
- ・ それ以外にも、可能性のある助成金制度を調査し、申請をしていくことを決定しました。

「カンパ金振込みの簡素化」

- ・ 郵便局からの「払込取扱票」に記載された振込み明細項目を全面見直し、ポレーシェ113号同封分から改定する。
- ・ 一般銀行から郵貯銀行口座への振込み可能を広報し、口座番号を記載していく。

「本年度予算の見直し」

- ・ 支援内容（病院・被災者団体への医療支援、ミルク支援、奨学金支援）は、予算どおりに執行する。
- ・ 「菜の花PJ」BDF定常運転に関して、現在ナタネ種子を約12t保有しており、今年度のBDF生産はこの範囲内で行い、購入は付属薬品のみで抑える。

以上、厳しい財政状況を乗り切って活動を継続するための当面の方策が決定されました。

皆さま、「賛助会員」「一坪キャンペーン」へのご加入に、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

（財政再建委員会 神谷）

「高木学校」の皆さんと交流（葉の花PJに大きな反響がありました）（伊那 小牧崇）

八月末の土曜日、高木学校との交流会を持ちました。会場は、救援・中部の夏合宿で利用したり、ディードゥッフ伊那講演会の会場でもあった「ロッジ吹上」です。

高木仁三郎さんについては、ご存じの方が多くと思います。亡くなる二年前、「市民の科学」の確立を願って、高木さんが仲間とともに創設したのが「高木学校」です。校舎があるわけではありませんので、市民と研究者の自主的な研究団体という良いでしょう。これまで「原子力」「リサイクル」「化学物質」などをテーマに研究を進め、その成果をブックレットにまとめ、発表してきました。最近力を入れているテーマは、「医療被曝」だそうです。この研究会に伊那から毎回参加している知人のTさんから、「今年の夏合宿は伊那で行うので、参加しませんか」と声がかかり、今回の交流が実現しました。

午後3時～5時の2時間、それぞれ30分ずつ発表して、残りの1時間は意見交換・交流という予定で始まりました。高木学校メンバーからの発表は、各研究班の活動報告と、医療被曝をテーマにした寸劇でした。メンバーの中にプロの俳優さんもいて、彼女の指導の下、練習を積み重ねてきたようです。素人演劇の域を超えた、見事な発表でした。

続いて私たちの発表。救援中部の活動についてご存じない方が多数だったので、発足から現在に至る概略と葉の花プロジェクトについて、ディードゥッフ講演会の際配布した資料を使って説明し、宮腰さん作成のDVD（15分版）を上映しました。予定時間を15分オーバーしてしまったので、原さんに担当してもらった質疑は短時間ですませるつもりだったのですが、質問が続出し、結局5時を過ぎてしまいました。メンバーの皆さんには、強い関心を持っていただけたようです。夕食後の懇親会にも誘われましたが、翌30日は名古屋で会議がありましたので、心を残しつつ辞することになりました。高木学校とは、今後も緩やかなつながりを持っていきたいと思っています。

<スウィトラーナさんへ補聴器を届けました。 ご支援ありがとうございました>

「～スウィトラーナの子ども時代は暗く、喜びに恵まれないものでした。彼女は子だくさんの家庭に生まれました。両親はアルコール飲料に溺れ、何日も家に戻らぬこともあり、本当の親らしい愛情を示すことがありませんでした。4歳の時から、スウィトラーナにとって肉親が傍らにいない別の人生が始まりました。幼児期の耳の病気と手術のため、スウィトラーナの聴力は低下



しました。そのことで、彼女はより孤独になりました。彼女は現在、福祉事務所から紹介された製紙工場の清掃係として働いています。難聴のため、もっと給料のよい仕事につくことは不可能です。ソーシャルワーカーが探すのを手伝ったアパートの家賃を払うこともできません。この困難な時期を生き延びる手助けをするべき肉親も、彼女にはいないのです。センターで寝泊りしている間に、彼女は難聴の人たちのための補聴器が存在していることを初めて知りました。～」

このような情報をポレーシェに掲載したところ、読者の方々から、補聴器支援へのメッセージとともにご寄附をいただきました。このご寄附によりデジタル式補聴器を購入し、9月23日に贈呈しました。外務省長期スタディプログラムの研修でキエフ入りしている戸村さんが、その贈呈が行われたジトミール州の行政庁保健局へ行きました。ホステージ基金のキリチャンスキーさん、ドンチェヴァさん、そして保健局のグサク医師、リハビリセンターの担当者、報道関係者が集まり、スウィトラーナさんに小さなプレゼントを添え、デジタル式補聴器を贈呈したとのこと。彼女は耳が悪いので、話すことも不自由でしたが、お礼の言葉「スパシーバ」を彼女の口から聞いたとの事。彼女のこれからの生活の一助となることを祈念します。 （山盛）

特集!! 再びラスキへ!! 原さんのラスキ村通信

09/12 **ラスキ通信** 9:00、キエフから原さん・戸村さんと竹内で出発し、ラスキに 12:00 過ぎ到着。これからラスキで 4 人の合宿生活(?)が始まります。食後、原さんが報告を書きかけたのですが、疲れが出たのか、そのまま寝てしまわれたので、竹内が代筆しました。

09/13 **ラスキ通信** 昨日はラスキ通信を書きながら、不覚にも曝睡してしまい、失礼しました。コヴェツキーさんは、約束どおりの時間に宿舎に来てくれ、順調に機械受け取りを終えました。

貨車内の様子を大雑把に言えば、全体の 6 分の 3 の部分は地区消防番所、1/6 部分はガス管理室、2/6 部分は共有部分としてはどうかと考えています。貨車内部の壁紙は変色し破れており、天井には換気用の穴があるのですが、雨水が入り込む可能性大です。また入り口の錠にも不具合があり、直さなくてはなりません。午後は足りない資材の買い出しに、戸村・竹内・原の 3 名でオブルチまでバスで行きました。バザールは店仕舞い寸前でしたが、梨・りんごを買うことができました。食事に生野菜系がないので、りんごでも助かります。明日からは、いよいよ貨車内で配管工事をします。ガス工事と搾油、間に合わせるよう頑張らねば…です。原でした。



〈BGプラントの番所となる設置小屋(廃車となった貨車)〉

09/14 **ラスキ通信** 朝一番から、竹内さんと原は現場に行きました。まず貨車の壁にパイプを通す穴を開け、貨車外部から配管をしました。作業は、パイプにネジ切り機でネジを切り、ソケットやエルボを組み付けるといふものです。ネジ切り機やソケットなどの部品は、以前ナロジチ病院水道工事の時に持ち込んだもので、それが BG 工事で役立つとは嬉しいことです。しかし、ここはラスキであり、途中 3 度も停電し、その度に 30 分は仕事が中断しました。原因は 1987 年製のヒューズボックスとヒューズ。ナイフスイッチの接触不良です。これらは今後の作業にも影響を与えかねないので、新品に交換する必要があります。

〈「ナロジチ病院水道工事」で活躍した、ねじ切り機〉



09/15 **ラスキ通信** これまで、搾油機は一度も動かしていなかったようで、試行錯誤しながら搾油機を動かしました。しかし、搾油機に種を入れても種や油粕が詰り、3 度も 4 度もシリンダーを外したり、高圧で固まってしまったカスを取り除いたりしなければならず、搾れません。ちゃんと搾れたのは 5 分間だけという最悪の事態となっています。屋にステーションを後にして、バスでオブルチでの買い物に出ることにしました。オブルチではこまごま足りない部品を買いました。その姿は、背中にリュック、首に針金の輪、左手に不凍液 10ℓ、右手にトタン板という出で立ちで、とても歩けないので、タクシーの運転手に電話をかけ、荷物を全部載せ無事合宿所、じゃない家でした…に辿り着きました。

ナロジチ消防署の蓋修理は、間違っって作ってしまった蓋寸法にコンクリート枠を合わせる、つまりコンクリート枠をダイヤモンドカッターで切るという、とんでもない荒業で修理完了のようです。



〈ウクライナ製 搾油機〉

09/16 ラスキ通信 昨日、搾油がうまくできなかったため、条件を替え再度搾油するためステーションには、竹内・宮腰さん。ガス現場には戸村・原と二組に分かれて作業をしました。再度搾油するため、種の焙煎は配電会社の台所で、中鍋一杯程の種を焙煎しました。搾油したところ、「分離されない・種が潰れないでそのまま出てくる・油や油粕が噴出する」などの不具合が出ています。戸村さんは、一輪車を押して農業企業体の敷地を歩き、十分な量の屑鉄を集めることができました。更に地面の穴掘り仕事もやり、いつもより活き活き働いております。日没までに貨車内部の配管（メーター・圧力計・脱硫装置までの配管）を終えることができました。



<鉄屑を集めて、脱硫装置用に短く折りました。>

09/17 ラスキ通信 竹内さんは種を煎り、戸村さんは炭焼きの準備の土盛り、宮腰さんと原は貨車内の間仕切りを壊し掃除をしました。間仕切りの壁の中には、断熱材として厚さ 4 cmほどのグラスウールかアスベストかが入っており、マスクを着用しました。間仕切りを壊し終えた頃、キリ・ドンチェヴァ・ディードッフ・ナロジチ新聞記者も同行し到着しました。配管を終えた貨車内部で、バイオガスの流れと構造を、原が説明しました。その後、ジトミル組とラスキ議長・ペロノーシコ氏・コベツキー氏と我々とで、会合が行われました。決まったことは

- 1.BG の世話人はコヴェツキー氏が手配。当面 1 ヶ月間は最低賃金一ヶ月 2,000 円程を支払う。
- 2.BG 施設の残工事及び修理内容は、貨車内部は壁紙・電気の配電盤修理。貨車外部は雨漏り修理・外部塗装。施設周りは、柵の設置・水の確保・原料の保管場所設置。
- 3.BG 施設に関する契約書の叩き台は、ホステージ基金が作る。なぜか農大は契約者にならない。
- 4.貨車は村議会の所有。

会議の後、搾油できない状態を説明すると、月曜日にディードッフ氏が来て搾ってみるとのことでした。夕方、加温装置の使い勝手の悪さが分かり、改善するための部品を宮腰さんにオブルチまで買いに行き買いました。宮腰さんの働きには、大いに助けられました。明日、竹内・原は残工事（加温装置周り・圧力装置）を行い、グレゴリー氏ともう一人に、BG とチップーについて使い方を伝授する予定です。



<「堆肥」と「新鮮な牛糞」（ウクライナでは、どちらも同じ単語なので…）取り違い問題発生！
注：新鮮な牛糞・豚糞その他を、継続して投入しなければ、バイオガスを発生させることはできない。
（写真は投入されてしまった「堆肥」）>

09/18 ラスキ通信 配管を終え循環ポンプのスイッチを入れても不凍液が流れないことが判明、モーター音はするものの循環しない。右往左往していると、ナロジチ消防署の署員が、予定より 3 時間も早く道具類の回収に現れ、ああだ、こうだとかねくり回しても循環せず、時間切れで引き上げることにしました。途中で引き上げるのは残念ですが、地元の人々の協力を得て、今後は対応策を考えなくてはなりません。ここでまたショックなことを見つけてしまいました。それは投入原料が牛糞ではなく牛糞を原料とした堆肥であったことです。これではガスが出る筈がありません。今後分解されない場合、最初からやり直さなければなりません。職員 2 名に原料の投入から配管まで説明し、今後の貨車の修理作業の打ち合わせを済ませました。

（奮戦記は次号に続く）

ナロジチ現地調査と広報活動 (2009年8月27日～約1ヵ月間の予定)

「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」のドキュメンタリー映画を制作している宮腰です。今回、2度に渡って約1ヵ月強の期間、現地に滞在し、調査・広報活動をする事になり、今、ナロジチでこの原稿を書いています。まだ調査途中ですが、現段階での報告をしておきます。



〈移住地区ゴルビエヴィッチの家族と
宮腰さん(左端)〉

当プロジェクトの認知度は、徐々に高まってきているとはいえ、その意義や内容をよく理解している人は多いとはいえない。

今回、原さん滞在時に、住民によく読まれている地区内の新聞社からの取材を取り付けたので、その記事を通して、より多くの住民に趣旨を理解してもらうことが期待できる。

菜の花については、このプロジェクトとは関係なく、地元の「新しい畑社」という農業企業体が大規模に栽培を開始しており、すでに現地では「見渡すかぎり菜の花」という光景を見ることが出来る。ただ、彼らによれば、ウクライナではまだ BDF に加工してもペイする段階にはなく、菜種を売って利益を得る段階であるという。

地区内には13の農業企業体があるが、「新しい畑社」以外はソ連時代コルホーズだったところである。多くはかつて数百人規模の雇用を維持していたが、今では従業員数20~30人程度で、給与が支払えずに家畜などで現物支給しているところもある。また、モテイキ村のように農業企業体自体が消滅してしまったケース、従業員なしで一人だけでやっているケースもあり、農業の疲弊状況の深刻さが現れている。しかし、ノリンツィ村の農業企業体のように「100人近い雇用を維持し、給与の遅配も金融危機の時に半月遅れだけでその後は発生していない」というところもあり、一様ではない。

地区内では、「新しい畑社」以外に菜の花栽培をしているところはないが、各農業企業体で菜の花栽培の可能性を聞いたところ、「関心がない」というところもあったが、多くは、「関心はあるのだが、それ以前に非常に厳しい経営状態にあるため、やりたくてもお金が無くてできない」ということであった。また、「仮に菜の花を栽培しても、菜種用の良いコンバインがないので、種の多くがこぼれ落ちてしまい、非効率である」という指摘もあった。農業機械は、今もほとんどがソ連時代のもので、ノリンツィの農業企業体でも、最新の機械は1992年製であった。

金融危機の影響は、ウクライナでは非常に深刻で、首都キエフでも多くの建設工事がストップし、動いていないクレーンがあちこちで見られる。このように国自体にお金がないため、国からの支援は期待できない状態であるが、このプロジェクトはその性質上、公的機関の協力が不可欠である。ナロジチ議会の副議長プロコペンコ氏は、「このプロジェクトを活用していくには、現在研究中のスモール・モデルを国に提示し、国に実地利用のための資金を要請しないと、地区行政として実施は難しい」という旨の見解を示した。

一般住民の菜の花に対するイメージは、「蜂蜜によい」以外では、「土地を痩せさせる」など、あまりよいイメージを持たれていない。内部被曝低減のために、自家菜園での栽培を促進したいところであるが、地元の人にとっては、自家菜園に食用でない作物を植えること自体が非現実的と映るようで、行政のインセンティブがないと難しいと感じられた。

BDF や BG に関しては、ウクライナではバイオエネルギー自体がまだ一般的ではなく、法律も整備されていないため、事業を進める上での大きな障害となっている。

このプロジェクトは、放射能処理が入る分、コスト的に事業として成立するような性質のものではなく、どうしても支援頼みとならざるを得ない。しかし、自立支援が主目的の一つでもあるこのプロジェクトの趣旨を考えると、事業として成立するモデルを提示しないのであれば意味がない(例えば、放射能処理部分は支援するが、他は自助努力次第とする、など)。

ちょうど、5年計画の中間地点にいる今、見えてきた問題点を精査し、「いかに実現可能なコストの範囲で実地利用に耐えうるモデルを提示できるかについて」スモール・モデル研究と平行して模索する段階に来ているのではないかと考える。

(宮腰吉郎)

「チェルノブイリ被災者・ゼムリャキ(同郷人)」(ウクライナ・キエフ市)での研修 —2009年9月～2010年3月の予定—

【外務省長期研修プログラム】戸村 京子

9月9日朝に成田空港を出発し、ウィーン経由で同日夜、キエフに着きました。とりあえずのホームステイ先に到着し、翌日から「ゼムリャキ」の事務所へ通い始めました。当初研修を希望していた UNDP (国連機関) は、忙しく対処が難しいとのことで、第2希望の「ゼムリャキ」になりました。チェルノブイリ事故で強制疎開となった、プリピャチ市からの移住者の団体です。ここは、2年半前の留学時にも親しくさせてもらったり、以前にも聞き取り調査に協力してもらったりと顔なじみの多い団体で、再会を歓迎してくれました。

まずは、しばらく話す機会のなかった覚えのないウクライナ語の練習がてら、近況を語り合ったり、目的を説明したり、また具体的な研修計画を組んだりしました。ちょうどこの頃は、ドイツの映像プロデューサーと女性作家が組んで、チェルノブイリに関する作品の制作準備のため、取材に入っていました。通訳は、キエフ在住のロシア語・ドイツ語の堪能なブルガリア人でした。その様子もなかなか興味深いもので、「今日は日本人もいて、インターナショナルな日！」だと、皆で言っていました。

その土日には、日本から BG 装置の追加作業に来た原さんとキエフの竹内さんと一緒に、ナロジチ地区ラスキ村へ、現地でのフィールドワークに出向きました。また、宮腰さんとも現地で合流し、地区内のいくつかの村を訪問し、村議会や農業企業体などで聞き取り調査をしました。また、時には作業を手伝ったり、ジトームルからの関係者も交えた BG に関する話し合いにも参加しました。その後、ジトームル市で「ホステージ基金」の20周年記念セレモニーに出席し、長い間の活動への慰労とこれからの協力関係について、ウクライナ語で短い言葉を述べました。

キエフに戻って、今度はロンドンから、日本人女性が「ゼムリャキ」で日本語・英語を教えるために来られるのを迎え、なんだか通訳のような立場となったり、クラスのお手伝いをしたりしています。

昨日(9/20)、インターネット接続がやっとできたのですが、これでやっと生き返ったような感じです。接続ができるまではなんだか孤立しているような心細い感じでしたが、ネットの威力はすごいものです。もはや、瞬時に連絡が取り合える便利なインターネットのない生活は、考えられません。携帯電話も買い、コミュニケーションの手段は整ったので、後は会話力を磨くのみです。以前からこの人たちと話していると、私の乏しいウクライナ語を「あなたの話したいことはみんなわかる」といってくれますが、今度こそきちんと話せるようにしようと思っています。現在ホームステイしている所は、ロシア人の年配のご夫婦の家で、ロシア語で話すことになります。話すのに疲れるのですが、大変親切なご家族で、なるべくあれこれと話すように努めています。これまでのように、「ゼムリャキ」を短時間訪問している時と違って、日々彼らと一緒にいると、一人ひとりの役割や性格・思いなどが少しずつつながりながらわかり始め、被災者団体の活動について学ばせてもらえる意義があると思います。(09.09/21 記)



<ホステージ基金 20 周年記念セレモニーに参加>

秋のイベント紹介

10.3 NO NUKES FESTA 2009

～放射能を出さないエネルギーへ～

エネルギー政策の転換に向けて全国から集ましましょう！

エネルギーのあり方に関心がある人・環境や食の問題に関心のある人、幅広く参加していただき、工夫をこらした企画を持ち寄り、エネルギー政策転換に向けて盛り上げていくことを目指して集会を開催！（チェル救のメンバーも参加します。）

日時：10月3日（土）10:00 開場

場所：明治公園（新宿区霞岳町）

あいちワールド・フレンドシップ・フェスタ

市町村と交流が盛んなフレンドシップ国を紹介するため、文化・生活の面から体験を交えて紹介する「フレンドシップコーナー」と、生物多様性の面からその国を紹介する「生物多様性コーナー」を設置し、楽しみながら国際理解を深めていくイベントです！

私たちは「ボルシチの提供」と「クリスマスカードの作成」を行います！

日時：10月10日（土）・11日（日）

10:00～16:00

場所：愛・地球博記念公園

フリーマーケットのお知らせ

名古屋聖マタイ教会にてバザーに出店します。バザーに出店する献品を寄付して下さる方、募集しています。家で眠っているいただきもののタオルや石けんなどをお待ちしております。是非、チェル救事務所まで、お送りください。

日時：11月8日（日）11:15～14:30

場所：名古屋聖マタイ教会 聖堂
柳城短大 体育館

国際協力 カレッジ 2009

今年度も国際協力カレッジを開催します。今回は2日間に分けて行います。

1日目は“1日NGO大学講座”で、私たちは“菜の花がひらくチェルノブイリの未来”と題した講座を行います。他にも6団体の講座が授業形式で、自分の興味ある分野の話しを聞くことができます。

2日目はボランティアを探している団体とボランティアをしたい人たちの「マッチング展」を行います。是非お越しください。

日にち：11月28日（土）・29日（日）

場所：なごや地球ひろば（名古屋市中村区）

見聞感学(ていてしてぶ)国際協力

岐阜市にある未来会館で10月1日から1ヶ月間、パネル展示を行います。

「見て・聞いて・感じて・学ぶ 国際協力」に参加しましょう！

チェルノブイリ原発事故とそれに伴う私たちの活動をふり返りつつ、これからも進化する土壤再生「菜の花プロジェクト」の役割と汚染地の未来を考える場です。

また、毎年恒例のクリスマスカード・キャンペーンを10月18日（日）に同館1階ロビー横で行います。

ウクライナの子供達に、手作りのクリスマスカードを贈りませんか？ 皆様のご来場、お待ちしております。

日時：10月1日（木）～31日（土）

9:00～21:30（休館日：火曜日）

場所：県民文化ホール未来会館
（岐阜市学園町）

ワールド・コラボ・フェスタ2009

今年もワールド・コラボ・フェスタに出展します！ ウクライナの病院や孤児院・小学校の子供もたちに、手作りのクリスマスカードを贈るため、私たちのブースでは「クリスマスカード作り」を行います。

この機会に手作りカードで、心の交流をしてみませんか？

また、2日目の14時頃からは、もちの木広場中央のワクワク体験村でワークショップを行います。ぜひこちらにもご参加ください。

こちらよりお待ちしております。

日時：10月24日（土）・25日（日）

10:00～16:00

場所：久屋大通公園「もちの木広場」

すべてのお問い合わせは、チェルノブイリ救援・中部へ（山本・黒瀬からのお知らせでした）

竹内さんのウクライナ便り

9月下旬、チェルノブイリ事故関連の取材でウクライナを訪れた日本のジャーナリスト Nさんと同行の Kさんの通訳をする機会があり、2日間、キエフからナロジチまで車で往復することになりました。『チェルノブイリ・ポスト』という新聞の編集長 Kさんの紹介で、プリピャチ出身の31歳の若者、Aさんに運転手を依頼し移動したのですが、助手席に坐ると、東洋人男性の白黒写真が計器盤の隣に挟んであります。誰かと思っていたら、後部座席のお二人が「誰なのか聞いてみてください」と言われるので、Aさんに質問したところ、ラマ教の某宗派の第16代の教祖だということでした。その後、少しずつAさんが話したところでは、なんと、私の住んでいるアパートから徒歩10分も離れていないところに、この宗派の人たちが設立したキエフ唯一の仏教センターがあり、毎日午後8時から数名ないし10数名が集まって瞑想をしている由。これはセンターといっても、一般のアパートを改造した施設なのですが、より都心に近いドニエプル河の右岸に土地がすでに入手されており、そこに新たなセンターの建物を造る計画があるそうです。私は、寡聞にして、知りませんでした。いわゆるオレンジ革命を支持した日本山妙法寺の僧侶が、ある時ウクライナに入国を拒否されたというニュースは読んだことがありましたが、ウクライナでの仏教の普及の程度については、ついそ具体的な話を聞いていなかった。Aさんによれば、ラマ教のセンターはウクライナの他の都市（ハリコフ、リヴィウなど）にもあり、ハリコフ近郊の村で、ロシア、ドイツ、フランスなどからやって来た人たちも含め、数千人規模の仏教セミナーが開かれたこともあるのだそうです。ラマ教のこの宗派をヨーロッパで最初に広めた人は、デンマーク人だという話でした。

このAさんがラマ教に皈依したのは、チェルノブイリ事故に直接は関係なく、彼が14歳の時遭った交通事故で臨死状態になり、「苦しい、もう死にたい」と意識していた時、「おまえは仏

教徒となって人を助けるのだ」との啓示？ を受けたのがきっかけだとのこと。とはいえソ連時代だったその頃、仏教関係の本を入手するのは容易ではなく、実際に信仰に入ったのはかなり後になってのようですが。

KさんやAさんが住んでいるのは、キエフ市内で、デスニャンスキー地区に次いでプリピャチ市からの移住者が多いハリコフ地区。Aさんは、広島社会学者Fさんに私が頼まれてほしい前に訳した短文の筆者でやはりプリピャチ出身のSさんとも友人だとのことでした。Sさんは、以前拙稿でも紹介したかと思いますが、プリピャチに関するサイトを主宰しており、またプリピャチを含むチェルノブイリ原発周辺の立入制限区域訪問を希望する人たちのためのツアーの世話もしている人です。Sさんのお母さんで、チェルノブイリをテーマにした作品を含む詩集も出しているLさんは、比較的最近、『プリピャチ症候群』という小説を自費出版されました。病気で臥せりがちのLさんのため、コンピュータ入力などはSさんが助力されたようですが、私は人づてにそれをいただいて読みました。Lさんは事故後キエフ市内の映画スタジオに勤めておられたことがあり、この本はその頃書かれたシナリオをもとにまとめ直されたものだということです。小説としては、少し弱いという気がしますが、事故後のプリピャチからの避難を描いた部分には、やはり当事者ならではの精細な記述があり、私などには興味深いものでした。たしか1,000部くらいの自費出版なのですが、誤字脱字などの修正をして、さらに増刷をする予定だと聞いています。

(9月27日)



事務局便り

ボラ助助成の完了報告にかかわる「宿題」を残したまま、シルバーウィークとやらに突入し、今ひとつ気分のすげない休日。これではいけないと、養老線沿線のウォーキングに出かけた。夏の名残の日差しは結構きつく、しかし、吹く風は爽やかな秋そのもので、なかなか楽しいひと時であった。目の前に広がる黄金の田圃や、揺れるコスモス、一点の雲も無い広～い空、滔々と流れる揖斐川を見れば、すっかり「いい日旅気分」に浸ってしまったのだ。さて、10月イベントの秋。チェル救はほとんど週末、「出店（でみせ）」状態となる。研修生・小島さん、「Nたま」黒瀬・山本先輩の張り切りコンビの活躍に期待すること大だ。外に出て、様々な人と出会い、期せずして、思わぬ「拾いもの」をするかもしれない。（山盛）

新Nたま研修生の紹介

はじめまして。9月からインターンとして、チェルノブイリ救援・中部でお世話になっている「小島裕司（コバタケユウジ）」です。NGO、NPOのことを勉強したい、人のために何かできないかと考えインターンを始めました。

今は、クリスマスカードキャンペーン、ミルクキャンペーンを中心に様々な事に携わせていただいています。自由にやらせていただき、そして責任あることも任せていただいているので大変ですが、スタッフ方のサポートもあり、形になりつつあります。まだまだわからないことが多く、日々勉強の毎日ですが、チェルノブイリのために、チェルノブイリ救援・中部のために、何かお役に立てればと思っています。よろしくお願いします。



編集後記

- ☆ウクライナ・キエフから、ポレーシェ用原稿や写真を送る。瞬時に編集委員からの返信が来る。アナログ的に、名古屋の事務所界隈を徒歩や地下鉄で移動しての編集作業より、ネットの情報伝達は断然早い！（京）
- ☆狭い事務所の一室で、4人がかりで秋のイベントのために展示パネルを更新した。「せっかく時間をかけるのだから」と気合が入る。ふと時計をみると…22時。夢中になって時間を忘れた。ぜひ、「岐阜市未来会館」でお会いしましょう。力作を見てくださいね。（美）
- ☆先日、長年愛用の扇風機が壊れた。「長い間ご苦労様でした」と殊勝に言いたいところだけど…ちょっとお、なんでいま壊れるのよおっ、シーズン終わりで売ってないじゃない！まだ暑い日があるのにどうしてくれるのよお!! 恨み節。（佳）
- ☆去る9月13日、米国ワシントンD.C.では、200万人規模のデモが繰り広げられ、「Tell the truth!（本当の事を言え!）」というシュプレヒコールが、テレビレポーターの声をかき消した。「国際金融」の世界は、ウラ年度末を9月30日に控え、米連銀（FRB）の倒産が白日のもとに晒されようとしている。日本のメディアは、今なお自公政権体制のプロパガンダ人間達が、失職を恐れてわめき散らしている。残念ながら、ほとんどの日本人が「911事件」を疑うことさえ忘れて、これから起きる世界の激変に、無知・無関心のままである。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473